



多くの学生を見守ってきた教室

八百屋、眼鏡店などキャンパスの外も積極的に撮影した。写真展では「もらってもいいか」と声をかけられ、そのままプレゼント。「大学と街があつての六本松。その全体的な雰囲気伝えることはできたかな」と振り返る。

◇ 工学部がすでに移った伊都キャンパスは「設備が新しすぎてもう一度、田舎から都会に出てきたみたい」と笑う。そして、新しすぎて困ったことに暗室がないという。写真を



長州のうどん屋



立て看板の前で

撮りためた「福岡」の写真

「僕にとって福岡といえはここ（六本松）なんです。移転前に何かしたかった」

今春で閉じる六本松

キャンパスで最後の開催となった昨秋の大学祭。写真部の高木竜太さん(22)工学部3年。初めての一人暮らしを始めた。は部員たちと撮りた

校舎や学生たちの姿は、もちろん、うどん屋、焼くために六本松や箱崎に通い続けたため

「留年寸前です」と頭を掻いた。

学研都市としてはまだ発展途上の伊都地

は伊都キャンパスにフ

【徳野仁子】



カメラを手にする高木竜太さん(22)徳野仁子撮影。他の写真は、いずれも高木さんの作品。



校舎の上から



携帯電話の普及で落書き板と化した伝言板。「伊都を盛り上げたい?」

区。学外の人との交流、インターを向けよう

も少なく、行きつけの居酒屋もない。「伊都

期にいる僕たちには研究施設であつて学

校という感じがしない。だからこそ今後、街を記録したい。

成長する

【徳野仁子】